

CHAIN

No. 17



An Organ of Fib. Chem. Dept. December '63

目次

学部統合問題特集		1
学長会見記		2
学部統合問題について町田先生に聞く		4
学部統合について感した事	相宅省吾	7
学部統合に関して	秋田佳宏	8
学部統合の問題——養蚕科として——	浅香純一郎	11
歡 喜	松原 博	13
鬼原美樹様	田中 充	15
え回生コーナー		19
知識人に栄あれ	金田洋二	20
下宿していた頃の生活	山下清吾	23
グラフト及びブロック重合	有松利雄	26
編集後記		

○○○ 学部統合問題特集 ○○○

学部統合問題—— これは、我々工芸繊維大学にとっては創立以来、幾度となく提起され、その度に立消えとなって来た問題であった。

ところが、今回の場合は、かなりその問題が具体的に発展し、統合実現の可能性も少なからずという状態にまで進行して来ている。

そこで私達はこの問題を取り上げ、ここに特集として、掲載する事になりました。

多少なりとも、この問題の真相の究明に役立てば幸甚大です。

—— 特集掲載記事 ——

1. 学長会見記
2. 学部統合問題について町田先生に聞く
3. 学部統合について感じたこと …… 相宅省吾
4. 学部統合に関して …… 2回生 秋田佳宏
5. 学部統合の問題 —— 養蚕科として ——
…… 3回生 浅香純一郎

学長会見記

11月18日

提快：自治会常任委員会

1. 統合整備委員会について

a) 構成メンバーは

評議員であり、評議員の出ていない学科（電気、生機）を除き、各教室1名ずつ。

b) 上記メンバーはどのようにしてきまったか。

評議員会が大学の最高機関であり、各教室の選挙により選出。

c) 上記委員会はいつごろ発足したか。

38年4、5月頃

d) 上記委員会は現在までどのようなことをし、又今後どのようなことまで出来るのか。

臨時施設整備委員会として1回開いた。具体的計画を企画し、評議員会の承認を得て最終的には教授会の承認となる。

e) 施設委員会の説明をしてほしい。

両学部より4名ずつ。

2. 統合計画について

a) 統合の目的は

統一体の成立、研究、教育のより良好な運営の為。

ここで文部省の予算原案は説明できない。まだ教授会での説明には至っていない。

b) 政府折衝はどの程度進んでいるか

評議会より具体案を文部省に提出し、文部省側の了解終り12月大蔵省と文部省の予算折衝の末うまくいけば来年3月に予算が下りるであろう。

c) 統合の実現はいつごろになるか。

実状よりみれば土地問題に2年、全完成には後2～3年かかるのではないかと。

4)統合の規模は

文部省規格の線により / 学科 4 講座別、40 名定員、1 学科 600 坪の規模とする。教養、実習研究室、体育館、クラブ室、寄宿舎等々計画にある。

尚土地購入においては、目下不動産研究所に調査と依頼し、当局としては、土地の値上りをおさえるべく、細部にはわたっては発表しがたいものである。

e) 学名変更について

個人的には考える必要はないと考える。

f) カリキュラムの変更はあるか。

変えないつもりであり、教室で決めてもらい評議会で決定する。尚養蚕科は 6 講座とし、繊維化学科が 1 つかえ、共通に 1 講座できるがこれは統合には関係がない。又学科増減は考えていない。

以上が自治会より提供してもらった資料を、抜すいして掲げたものである。根本問題としての土地の問題が未解決であるので詳細なる計画の全ぼうは知り得ないが、いずれ正式なる発表がいはやくあらんことを切望するものである。最後に資料を提供して下さった自治会常任委員会に誌上をもってお礼を申し上げます。

原稿募集

内 容 : 自由 (こちらからあるテーマをあらかじめ提することもあります。尚、次回は四回生にとつて最後のチャンスとなりますので四回生各位の投稿を大いに期待しています。)

用 紙 : 所定の原稿用紙 (編集委員にもらってください。)

期 限 : 時になし。

学部統合問題について町田先生に聞く

担当 佐藤光則、中村隆博両編集委員

京都特有の底冷として知られる冬の寒さが、その厳しさを増し始めて来た12月3日、私達二人は町田研究室を訪ねました。白亜の繊維化学教室の二階の東北の一角、そこが先生の研究室である。私達新米記者二人は緊張した面持で先生の室へ入って行きました。すると、科学者というムードが身体全体をつつんでいる様な感じの町田先生が笑顔で迎えて下さいました。実に好感の持てる先生である。しかし、「人の室へ入って来る時はノックを忘れてはいけないよ。」とやさしくたしなめられる。私達新米記者はノックを忘れる程固くなっていたらしい。

—— 実はチェーンの編集員の者ですがと早速切り出すと——

と切り出すと、

「ああ、統合問題についてのインタビューの件だね。」と笑顔で答えて下さり、私達の緊張をほぐして下さいました。

早速あれこれと質問してメモをとる。

—— 大体、この問題が持ち上って来た動機は？

「去年、私が評議員をやっておりました時に、学長から一つの事実が明らかにされて……。その事実っていうのは、この繊維学部内に道路を敷設しようという京都市の都市計画の事なのですが、それは昭和八年に既に決定されている法案で、今更急にどうという程の事もないと思われているのですが、ともかくそれじゃ学部をどこかへ移転した方がよいという様な話になりました。又一方工学学部のある松ヶ崎の方も最近ゴミゴミして来た事だから、この際、それ迄の念願であった学部統合という線に沿って、新しい場所(敷地)を求めようとする方針が打ち出されて来たのです。」

—— で、その敷地予定地の候補としては……？

「工学、繊維両学部に必要な土地となると、どうしても十萬坪は下らないのです。それで、宇治、上賀茂、鷹峰と候補地が上られ、検討されましたが、予算の関係もあって、十萬坪もの土地を買上げるのは困難であるとの結論に達しました訳です。それで、私達の方向は学部統合に焦点を合わせる事にな

りまして、それじゃあ、今の工芸学部のある松ヶ崎付近に繊維学部を移転しようという方向に変わっていった訳です。

——どの位の土地が必要で、どの位の予算が必要なのですか？

「今繊維学部の敷地は二万坪なんですが、それよりも縮小しての統合なら、反対だというのが私達繊維学部の者の意見なんです、その二万坪を買うためには、地価五万円として、十億円の地代が要る訳なんです。今その要求に対する検討が大蔵省で成されているのではないかと思う。」

——それでは、その二万坪の土地の予定地は決まっているのですか。

「土地の買上げに関して、予定地が外部に漏れてしまうと、その地代が騰貴して、予算面に着しい障害を来す恐れがありますし、又大蔵省よりの予算が要求より、下回る事は充分予想されますので、それが余り着しい場合は、この計画はご破算という事に成りますので、もう少し具体化する迄は何とも言えないのです。ただ松ヶ崎の近くの保険局の老舎の敷地等も有力な候補地として検討された事は事実です。」

——ではもし、統合が決定し、スムーズに事態が進んだ場合、今の繊維学部の敷地はどうなるのですか？

「この繊維学部の敷地がうまく具合に売れるなら、土地買上げの際の予算面でも、少しはスムーズに行くのではないかと思います、今のところ未だ、そんな見通しは全くありませんし、又それは統合が完全に決定してからの話です。しかし、その売上金は新設定地に於ける校舎、実験室の建築費等にあてられる事になるでしょう。」

——記者等は、統合に関して、学部内の一部分だけが工芸学部の方に吸収の様な形で合併されるとか、或いは養蚕科は京大の農学部へ合するとかといった噂を聞いた事がありますが……？

「養蚕科が京大の方へ行くというのは全く知りません。それから、学部内の一部だけが合併するという案はありました。例えば、教養部だけが合併するという案です。しかしこれはきっぱりと繊維学部側から反対しまして、破案となりました。だから統合するなら、全学部まとめて統合する筈です。尤も、教養部に於ては繊維・工芸といった枠を取りはずしてしまうという案や、或いは学部の区別という枠を完全に取りはずして、単科大学という形にもっていこうとする案はあります。(註、目下のところ我工芸繊維大学は、工芸繊維の二学部から成るユニバーシティである、案外工業大学としてカレッジの如く思っている人があるという話なので、念のために……)」

——又、それでは統合された後の学校名はどうなるのでしょうか？

「現在の京都工芸繊維大学から、『京都工業大学』というスッキリとした形に変えるという声も相当あるし、私自身もそれに賛成したいです。しかし養蚕科は決して、工業とは言えませんから、結局今のままの名称で行くのではないかと思います。それから、『繊維化学科』と言う名称ですが、これも京大の高分子化学科²にならって、高分子化学科、或いは高分子科学科更には高分子工学科等の名称が考えられましたが、今のところ具体化しておりません。繊維化学科として、業界に於ても、その名前も売れておりますから、そのままの方が良いかもしれませんね。」

——では統合に関して、反対意見を持っておられる方も先生方の中におられるのでしょうか？又、統合の可能性についてズバリ一言？

「大体に於て、大多数の先生方が面学部³に於て賛成されています。大も、少数ではありますが、工芸学部の中には、『繊維学部の者に来てもらっては困る』⁴と言っておられる先生や、又うちの学部にも、『繊維学部の伝統を死守する』⁵と言っておられる先生もある事はあります。で、まあ結局今のところ、統合実現の可能性は50%と見ているのですがいかがなものでしょうか……。

室の一隅で、室を温めて燃え続ける石油ストーブの上のヤカンのふたが、『カタカタ』と鳴り出した。時計を見ると、12時15分を指している。いけない、お昼の時間だ。先生にご迷惑をおかけしてはいけないと思い、奥向をロボットで最後に来年度の講座編成の事について伺いしてみた。

——統合の話は、これ位にしまして、最後に、今年で岩崎先生も辞められるという事なので、来年度からの講座制について、お話を伺いたいのですが……？

「今年返は、私達の繊維化学科は四講座編成であったんですが、来年度からは、一講座増して、五講座になる予定です。それは従来八講座制であった。養蚕科が来年度からは、六講座に減少して、少なくなったうちの二講座が私達の繊維化学科にまわされるのです。新講座は、『有機合成化学講座』⁶なのですが、まだその講座の教授スタッフは決っておりません。それから岩崎研究室の岩崎先生の後、誰が教授になるかという事も決っておりません。けれどもこの人ならば⁷という人を抜擢するなり、招くなりしようと思っております。」

石油ストーブの上のヤカンは増々、大きな音をたててふたを鳴らしていた。一時間余にわたるインタビューを終えて、研究室を出ると、冷んやりとした外気が、上気した私達のホホを快くつつんでくれる。統合に対して、少なからず、不安を抱いていた私達は、このインタビューによって、決して、私

達繊維化学科の者が統合によって損失する事はないと心を安んじながら、白壁に囲まれた廊下を歩いて行くと、心なしか靴音も軽快なメロディーを奏でているかの様であった。

—— 中村隆博記 ——

学部統合について感じた事

相宅省吾

Chainの編纂子より現在問題となっている学部統合についての意見を書こう原稿の依頼があったが、其れについては特に繊維化学科にとっては幾論の余地のない所である。只だ何故統合出来なかつたか、また如何なる要因が統合をさまたげていたかを冷静に検討する必要があるのではないか、しかしこれも冷静に分析して行けば直ぐ了解出来る所であり、其の議論すら私個人にとってはずっと以前に出ている所であり、何も此所を仰々しく取り扱はなくてはならないことではなく、むしろ統合しなくては立ち行かないと云う事態に立ち到っていると思う。

では何を議論し、何を考う可きか、それは繊維学部が、繊維化学科が今迄何をして来たか、又現在何をしているか、又将来何をすべきかと云うことを職員、学生、先輩、更に一般の人達と共に語り考え具体的な案を打ち出さねばならない。

先ず繊維学部の足跡を見てみると職員、学生の努力にかゝらずその業績の上り方が誠に遅々としていることは万人の認める所である。(中村先生の素晴らしい仕事はあるが之は高等蚕糸のまた養蚕科の系列にせよ繊維との関係はむしろ今後の発展にかゝると思う)、各人は皆勝れた才能をいだし、人一倍努力しながら成果の上らないと云うことははっきり云つてテーマの選択を誤つたと云うより仕方がない。誤解があつては困るのだがテーマの本質に良いとか悪いとか言うのではなく、それが我が大学のような工科系統の学部にあつては夫がすぐ世の人の役に立った、また将来素晴らしい役に立つかの可能性を秘めているか否かと云うことゝしかも模倣でなく実行可能であるかどうかと云うことである。

では現状はどうであろうか。繊維化学科が生れて20年、繊維学部となつて15年この目覚ましい発展中の繊維の、あるいは高分子の学問更にこの産業にあって無数の我が繊維学部の、繊維化学科の活躍する場があつた筈である。いたずらに教育に名をかりてトコロテン式に学生を押し出すことのみと業とし、研究費の不足を口実にしてその日暮しの安んじをむさぼっていたと云われても辨解の余地はないのではなかつたか？ しかも繊維を看板をかゝげてい

ない大学において、近くは工芸学部においてすら繊維、高分子の仕事を行い業績をあげている所を見れば上記の自己批判もあなづきの外れたものではないと考える次である。此の様な事態に何故陥いつたのであろうか、将来この誤りを犯さないよう自戒しなくてはならない。

今大は欧州共同市場の結成から、会社の合併、吸収、更に大学間の共同研究が行われようとしている。そして世の中は益々競争的となり、如何に完全な学正はあっても実力のないものは取り残される高度な、はげしい技術革命の嵐が吹き荒れており、生存競争は誠にすざましいものがある。この嵐は教育の世界、学問の世界に吹き込んで来ることは好むと好まざるにかかわらずさけ得ないものである。いたずらに象牙の塔の園のからに閉じこもって蒸し焼されるのを待たずに天所より出て、この嵐に真正面に立ち向う覚悟があるかと 私は深く疑う次である。

重ねて云う、繊維、繊維……と云うかくれみのにくるまつて各自思い思の仕事？をし、しかも見る可き成果の未だ上らない我々は深く反省すると共に具体的な案を打ち出し、いたずらに政治的な駆け引きをもって相手の発展のブレーキになることをやめ、誠意をもって統合について考える可きであろう。

(誠に煮え切らない文章になったが御容赦をこう)。

学部統合に関して

2回生 秋田佳宏

自治会として、今回の学部統合に対する基本的態度を明さらかにすると共に、各学軍でこの問題に対して、主体的に取り組まれ、学部統合対策委員会を強力にするよう努力される事を望んでいる。

まず、11月18日の常任委員会と学舎との会見の印象を述べたいと思う。結論を先に言うならば、今回の計画は「上からの改革」であるという事である。我々常任委員会は、現在問題になっている統合計画が、いつ、どのような組織で、どのような理由でもって企画されたのかを質問したのであるが、学長の説明は「京都市の都市計画で、繊維学部の構内を十文字に道路が設けられる事が十軍前から決定していた。学校としては、現在の繊維学部所在地に固守する積極的理由——例えば、地質、水質等の自然条件が現在の所在地以外では得られない等——を持たない。だから、繊維学部を移転さずとしたら、現在の工芸学部付近又は全く別の土地を求めねばならないのだが、工芸学部

は既に、京大西部構内から移転した歴史を持っており、コンクリートの永久建築も立っている事だから、工芸学部付近に移転させる事が望ましいのだ」という様な主旨であり、我々の期待していたような回答は全く得られなかったのである。即ち、我々は今回の移動は、両学部が隔絶している事により起っている障害——例えば繊維化学科と色染工芸学科で同様の研究を行っているにも拘らず、教授・学生の交流が困難であり、研究上設備も重複して購入しなければならないとか、学生の両学部での受講が認められているにも拘らず、実質上不可能に近いとか、サークル活動を合同でやる上に非常に困難である等の——を除くためのものであるのだらうと考え、そのように期待していた。しかるに学長は、教授・学生間にそのような障害がある事を認めながらも、都市計画が契機になったのだと説明したのである。我々繊維学部の教授・学生に非常な影響をもつ計画が単に都市計画を契機として、進められてもよいのだろうか。我々のこのような不満は、以下の回答により一層強まったのである。即ち「今回の計画については、臨時施設整備委員会（非公式の組織）で一応の線を決め、それを両学部の最高機関である評議会に提出し、更に、両学部教授会で決定した」との事である。我々はここにも、不合理を感じるのである。即ち、我々の見解のように、統合計画が、真に研究上・教育上・その他の活動にとり必須であるというならば、当然、両学部教授会等の直接研究・教育に携わっている機関が最初に発議するべきでなかろうか？ にも拘らず実際はその逆に最後に両学部教授会に計画案が提出されたのであり、我々学生には、未だにその全貌を示そうともしないのである。

計画案は、現在大蔵省で予算決定をまっばかりの段階まで進んでいるのである。そして、官方の通例として、その計画案には各学科・各講座の規模、研究内容、施設設置に関する規模・内容が含まれており、我々にとって重要な意味をもつ学生会館、図書館、体育館・クラブ活動施設も含まれているのである。にも拘らずその計画決定には、我々学生の意向は全く加えられておらず、未だにその計画内容さえも、明らかにしようとしていないのである。このような秘密主義的・官僚主義的態度は、我々常任委員会が会見冒頭に述べた大学運営に関する教授・職員・学生三者一体説に対する「そのような原則は当然の事である。しかし、個々の問題・重要な問題について一つ一つ学生諸君に意向を打診しては問題の解決は非常に非能率的である」との見解によっても、露骨に現われている。我々は、重要な問題・根本的な問題だからこそ、三者一体となって解決に当るべきであると考えている。しかるに、上記の回答は原則は認めると言いながら、実際上はその原則を無視してしま

っているのである。一体実質内容を伴わない概念が、どのような価値を持つ
と云うのだろうか。それはまさに、無に等しいのである。

さて具体的計画についての問題点は「統合後の現模は文部省規定に従う」
との回答に集約されている。即ち、現在の経済界の要請——貿易自由化に伴
う国内市場及び国内の生産体制の再編——による科学技術振興政策と理工系
大学の充実は今後の我々の科学の進歩の上にどのような役割を果たしているの
であらうか。「例えば、日立の研究投資は50億円であり-----東レも
57億円の研究投資を行なっていると言われる。これに対し文部省が全国大
学に支出する科学研究費は合計で'60年度29億6千万円にすぎない」(三一
新書「大学」より)のである。大企業一社の投資する研究費の半分程度の研
究費を、全国の大学で分割しているのである。このような僅かの研究費を与
えての科学技術振興政策はどのような成果を将来の日本の科学の進歩に対
して上げ得るのであらうか。科学技術を進歩させる為に必要な、絶対不可欠の
基礎部門の研究を行なわなければならないはずの大学は、今や大企業の技術
者養成所に成り下ってしまった。科学技術振興とは実は、科学技術者養成で
あり、科学者養成ではない。このような政策を進めている文部省の示す規定
とはどのようなものであらうか？ それはもう、我々の意向とは非常な隔り
をもったものである事は明らかではないだらうか？! なのに、我々の大学をそ
の規定にはめこもうとしているのである。

所で、統合が今後4~5年で完成するとして、その間我々繊維学部には学
者は、如何なる状態に置かれるのであらうか。ここで明らかな事は、完成後
迄、我々の研究・教育・厚生施設上の抜本的改善はほとんど望みがない事だ
である。即ち統合後移転させる事の不可能な施設——例えば、校舎・体育館・
学生会館等の建物——は建設されない可能性が非常に大きいのである。現在
の歩けばガタガタと響き教室内での講義が聞きとれない木造校舎、サークル
活動をするにも物置きにしかならないクラブボックス等を新に建てる計画は
本学部の現在の構内に限ってはほとんどないのである。我々は以上列挙した
ような不条理を黙認する事は出来ない。我々は、学生の当然の権利として統
合に際して我々学生の意向を積極的に反映させなければならない。

我々は、大学運営に関する三者一体の態度を確認し、教授の先生方と共に
統合計画を我々の手に取り戻さなければならない。

ミミミ
— 学
学長
るが
これは
る。も
を目標
いくに
意の結
な高度
性格を
カデミ
にとい
ついて
も明瞭
産物で
なる。
前向き
ったり
過する
るなら
生と乗
方の線
北かど
要す
で討議
われわ
てしま
人的発
という

学部統合の問題 — 養蚕科として —

S2回生 浅香 純一郎

— 学部統合に関してその全貌を明らかにしてほしい。 —

学長「進行中だが文部省では本学の意向を了解し、ノ2月大蔵省で折衝するが……。大蔵省からの予算は来月になるだろう。

これは私が始めて学部統合問題の大略を知った、学園新聞メロ号の再録である。もし統合案が純粋にタコ足解消、文教施設の整備、老朽施設の建てかえを目指すものならば工織が「国立大学ボロ学校」の汚名をけ飛ばし将来発展していくに又とない機会である。しかしこの統合案が本学の意向、即ち全学の総意の結晶ではなく、或る種の権力の望む様な京都工業大学に象徴されるような高度経済成長の必然的要求である技術へ技術へとなびくものであるという性格をもつものならばそれは工織から「社会性をもった学術の中心」という新アカデミズムの理想を追いはらう以外のなにものでもない。私は工業学科大学にという社会の要求という隠れ蓐を被った大学に対する権力の積極的介入について、敢えてその意図を明らかにしようとは思わない。その意図は余りにも明瞭になりすぎているからである。もし統合案がそのような権力の介入の産物であれば或る人の言を借りれば「国立大学工織から国立工専への脱皮案」なる。そして学生は入学時からその進路を決定され、その作られた線路上を前向きか後ろ向きか知らないが進んでいく。その線路は決して山くずれに合ったり台風の為に壊れるのではない。たとえあったとしても彼らの汽車が通過するときにはちゃんと復旧しているのである。しかし歴史を弁証法的にみるならば線路は有限であり汽車は必ず停止せねばならない。汽車とは彼ら学生を乗せる為に資本家で作った頑丈な学校の事である。従来からあるもう一方の線路はなかなか彼ら資本家の要求を消化しきれず、昨年彼らはその老朽化かどうか知らないがその線路を取り換えようとしたばかりであった。また

要するに統合に関して早急に全学的な協議体を設け統合案を民主的な立場で討議すべきであろう。一般に大学における教育と研究は盾の両面であってわれわれ学生にとっては就職の為の単位を取る為狭く小じんまりとまとまってしまう場ではない。そして研究に魂を打ち込む学者によって教育され、全人的発展を計るべきです。したがってアンダーグラデイトでは全国唯一という期待を担うべき代々の養蚕学科に於ても日本の養蚕を踏んまえて立つ

ガイジョンとそれを実行に移せる放養とを会得しロマンにあふれた学生になることを要求されている。4千何余年の伝統を誇る養蚕、他繊維では代用できない絹の効用、又農基法に大きくゆれる零細農業の堅実な兼業としての養蚕の発展或いはボンビックス・モリに生物学的研究の情熱を燃やす etc. これら全て学窓を出た時世に若手としてそのリーダーシップを岡ねなければならぬ問題である。現代の養蚕を批判し、又それを改革する為に厂史の重臣或は農村特有の保守の潮流に流されていゝは何も出来ない。ロマンと実行力これは養蚕学科としては不可欠のものである。従つてこの度の統合案に我々をその様な学生に鍛えあげてくれる工織を設計するものであり新アカデミズムに満ちた學術探究の場、真に学校教育法オオス条に規定されているような工織を設計するものであることを望みたい。以上は全くの私見であり求められるままチェインに投稿させていただいたが何も我々学生には具体的に知らされていない為の資料不足その他の為一般的に分りきつたことしか書けなかつたのは残念である。

—◇—フ。□ムナード—◇—

—回生 T. N

1963年もう残り僅かである。"光陰矢の如し"先哲の至言が身にしみる。年末になると誰もがする様に、私も又、今年1年の人生行路のわだちをたどり、追憶の静かなる淡青色の喜びと悲しみにひたる。

極寒の中での受験勉強。受験、落才、合格---。追憶の走馬燈はやがて、上賀茂の堤に咲き乱れる桜花と松ヶ崎の工芸学部を映し出す。咲き乱れる桜花はやがて、五月雨に色香夫せ、新鮮な緑の山野にその主役を譲り渡す。繊維展、化学実験、試験等の幾ページかの後にやがて入道雲の向うから枯葉がこぼれて来て遂に追憶のストリームは眼前の石油ストーブの中に吸込まれて行く。----- 年末になると幾度となく繰返して来た平凡な感傷であるが、私の最も好きなfeelingの一つである。

学生にな
は代用で
しての養
etc.

なければ
丁史の重
ンと実行
合案に我
アカデミ
いるよう
あり求め
体的に知
か書けな

の至
今年
の喜
馬燈
部を
新鮮
験等
之未
まれ
平凡

歡 喜

C4回生 松原 博

年の暮ともなると毎年音楽会の終止符として、ベートーヴェンの“オ九”が演奏される。何故かと云う理由は色々あろうにちがいないが、今では1つの年中行事として受けとられている。しかしその理由をもう一度考えてみるのも面白いと思う。私がこれから書いてゆく文の中に読者はいくつかの反発を感じられるかも知れない。そして私はそれを期待している。その反発の中から1つの思考をしてほしい。

私がこのオ九シンフォニーを初めて聴いたのは小学校の6年生の時だった。偶然であつたように思う。ラジオのスイッチをひねると、私の知らない音楽が流れ出した。それが“オ九”であつて毎年12月に演奏されるものであると云うことは私の全く知る所ではなかつた。何故私がその時スイッチを切りずに聴き続けたのかわからない。普通の場合自分の全く知らない曲で長い曲ならば、最後まで緊張して聴くのは子供には無理である。とにかく私はあの長い曲のオーケストラの途中から聴き出した。私は圧倒されていたにちがいない。私は何を考えていたのだろうか。何を感じていたのだろうか。

私はあの有名な“歓びの歌”のメロディーは知っていた。しかしそれは何とすばらしい形を現われたのだろうか。低い音で地の底から湧いて来るようにあのメロディーが現われたときに私が受けた印象は全く新しい物であつた。“ぞくぞくっ”としたのである。それは多分私が本当に感激したからだと思う。その時には勿論自分が感激しているということなど頭には浮ばなかつた。私は完全に音楽に惹き込んでしまつていた。小学生が寒い板の間に1人で聴いている図を想像してほしい。今から約11年前の12月であつた。それ以来私は毎年ラジオで、音楽会をこの曲を聴いている。

この辺で最初に書いた問題について考えてみよう。最初にことわつたようにこれは私の私見である。私が今までに得た知識と音楽における経験を基にして書こうとしているのであるから、未熟な文になるのは、許していただきたい。

ベートーヴェンの1生は苦難の1生であつたことはだれでも知っていると思う。しかし彼はその苦難を通じて幸福であつたと云うことは仲々理解しにくい。現代人の中にはその物は含まれていないからだ。現世の苦難、外的な苦

難が非常に大きい場合、人はその魂まで不幸になってしまう。しかしベートーヴェンは我々がどうても耐えることができないような外的な苦難に打ち勝つ魂を持っていた。そして、ベートーヴェンは自分が偉大な魂を持っていることを知っていた。彼は「第九」を自分の為には作曲したのではない。彼にはそのような物は必要ではなかった。彼は他の弱い人間の為には作曲したのである。ともすれば外的な不幸の為に生きる喜びを失いやすい我々全ての為には作曲したのである。私達はこの曲を聴くことによつてベートーヴェンの心の中にあつた根本的な物を感じとることができる。それは生への喜びに他ならない。私達の生活は楽なものではない。喜びを持ち続けることがむづかしい場合が多くある。ベートーヴェンは歓喜を交響曲で人類に示そうと長い間考えていたと云うことである。そしてベートーヴェンはこの曲を書いた3年後にロマン・ローランの云う「彼の全生涯の悲劇の終結」を迎えたのである。彼は自分の魂に常に持っていたものを我々に示して死んで行った。音楽を好きでない人でも彼の生き方を知る事は非常に意義のあることである。

私達が年の暮にこの第九を聴くのは生きる喜びを自分の魂に与える為である。明日への希望と云う様な物ではない。その瞬間に生きていることの喜びを感じる為なのである。そこから新しい希望が自然に生れて来る。外的な苦難にたら向う勇氣が湧く。もし音楽を好まない人が読者の中に居られたら私はその人にはベートーヴェンの第九を聴くことをおすすめる。それ以外の音楽は聴かなくても良い。これは趣味とか放養と云うものではない。

私はこの「第九」を初めて聴いた時の感動から今も一歩も前進していない。初めて聴いた時にすでに最高の感動を持って聴いていた。今後もこれは変わらないだろう。何故ならばこの曲は人間の魂の深奥にまで入り込みその根本的なものをゆさぶるからである。

編集部紹介

4回生 有松利雄
 金井政洋
 樋本 勲
 堀江、玄

3回生 加原敬助
 2回生 鶴野高資
 小川信夫
 宮崎能夫
 1回生 佐藤光則
 中村隆博

伊

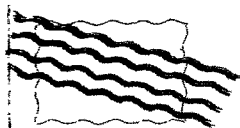
美樹さ
 高尾の知
 そして、
 早いもの
 え炭とし
 でも、き
 けれど、
 となつて
 今迄の王
 ます故、
 それは美
 ほしいの
 美樹さん
 中学二年
 さなが
 その美
 決して
 ぼくは
 と受け
 美樹さん
 美男は
 です。
 早い所
 話が大

伊丹市梅の木町一丁目二八

鬼原 美樹 様

伊丹市舞住町五六二

1 回 生 田 中 充



美樹さん、お元気ですか？

高尾の紅葉も枯れ落ちて、京都にも本格的な冬将軍が襲ってきた様です。そして、今年もこれが最後のお便りになってしまいました。

早いものです君に毎月、お便りをさしあげる様になって、四回目の賀春を迎え様としているのですものね。

でも、その間、一通の返信すらも戴けなかったことは一寸ショックでした。けれど、君のあの不惑の堅城にささやかでもこの便りの矢玉が有効な破壊力となつてぶつかっているものと信じ今月も筆を執りました。

今迄の五十通余りの手紙と同じく、本来だけ真摯な態度で正確にしたためます故、屹度ぼくの所業や考え方に幻滅される様なことがあるでしょうが、それは美樹さんが私の姿を本来の丈正しく知って、その上で私の所に嫁いでほしいのです。

美樹さんは、まだ、中学生——でも、ぼくが貴女を見初めたのはぼくが中学二年、君はランドセル姿で鼻水をたらし、姉さんのお尻を金魚のウンコさながら、まっわりついていたんですもの。

その美樹さんには毎月のお客さんもあって立派なお嬢さん——

決してぼくが結婚の申込みをしたって早くありません。ぼくはそう信じます。ぼくは二年も浪人しましたし、人間は良く出来ていて奥さんを大事にすること受け合いです。

美樹さんの年頃では兎角“面喰い”が多いものですが、あれはいけません。美男は高慢な奴が多いです。それから秀才、あれもイケマセン、エゴが多いです。金持、力持ち、陰のあるニヒル、全部駄目、京工織のC科のぼくで、早い所、手を打ってしまうのが一番賢明です。

話が充分横道にそれました。じゃ恒例の“行状記”から初めましょうか。

「今月の行状記」

△十一月一日から二日まで、選挙のアルバイト。候補者運なくして落選、
1日700円、二食付き、待遇良

△23日土曜、ご存知の腹違いの妹と八瀬大原へデート。

途中、中学生風の不良数名に襲われる。

あのう、こういう時、ぼくは、あまりいい恰好せずに逃げることにしてま
す。百貨店並の人混み、観光地としては不可
公衆便所が少いですね。これは女性としての妹の意見です。

△25日 月曜、雨天にて体育祭中止

同日18時頃から24時頃までコンパ。会費600円、但し松井君とぼくは
悪酔いした為。追加の飲食物代金約4000円、折半してたてかえる。
未だ返済されず。——忘れのやいなと思うんだがなあ——

△12月1日 “奇跡の人”妹と二人で観る。

ぼくのデートの相手はほとんど妹です。工織にだって女の子は居るんだが
なあ、——多少出来の方は悪いけど——

ここで結婚後の参考にはぼくの酒癖について話しておきます。

陽気な酒です。大体限度が徳利です、6本、ビールで半ダースぐらい、
でもこの日は、悪条件が重なってすぐアゲました。

河原町三条“太平楽”の便所の中です。汚した所は自分で掃除しました。
掃除がてら、便益とサシで遊ぶこと30分。別に水洗便所が珍しかったから
じゃないんです。後、すこし寝ました。半畳ぐらいで狭かったけれど、
アゲた後の解放感でいい気持ち——便意をさばっていて目的を遂行した時のあ
の感——多少、相似通った所あります。

便器の周りにぐるりと、どぐろをまいてヒジまくら、大体想像がおつきです
ね。親爺はお金を二つ持って帰りましたますが、ぼくはそんなことありません。
多少常時より多弁になる程度です。

それから、コンパの時、西山君（スオの1回生）が撮った写真があるん
です。一寸、男の人をファスナーを締め忘れた所が写っているんですがねえ、
その写真を三人の女の子、一人のこらす貰ってるんですけど、親にみせるつ
もりでしょうか。他人のことですけど心配です。

今日の
種は狐
種は犬
三耳
飼主の
飼主に
然し一
寂しが
ことあ
二耳目
居ただ
絶えず
結局は
予測し
預想に
そうし
表面は
無愛想
一倍極
ぼくは

今日の
推理小
事は、痴
て起る犯
れたのは
推理小説
犯罪者は
にみせよ
緊急避難
そう、こ
に考える
か、立場
繰りに繰

今日の「ぼくの理想像」は「猫」。

猫は孤独に徹し、生命を削らないで生きている。

猫は犬と違って無愛想な動物だ。

「三年の恩を三日で忘れる。」などと言われている。

飼い主の前を振り向きもせず、そしらぬ顔で通り抜ける。

飼い主に「可愛がってもらおう」などという気持はさらさらないらしい。

然し—— ぼくはどうだろうか。

寂しがりやで孤独が怖ろしいぼくは、ぼくは他人と自分を結びつけ、

ことあるごとに心細さを放とうとする。

二年目の浪人が決定した時もそうだった。同級でたった三人、同類の者が居ただけで心の慰めになった。

絶えず一人きりではおれず、他と関係しないではおられない。

結局は複雑な対人関係に悩まされ、心を苦しめ、流されることを充分に予測しながら、愛情や、反情に悼をさす。

孤独に徹し、非人情の世界を得々とカッポする猫が羨しい。

そうした猫の人生観が人間の社会にそのまま通用するとは考えないけれど表面はどうであろうと、他人に雷同しない人間でありたい。

無愛想で他人との衝突が多い変人のぼくは、かえって他人との関係に、人一倍悩まされているのではないだろうか。

ぼくは猫が羨しい。

今日の「浮言」：「清張のバックヤード」

推理小説界は松本清張によって、その戦後の黄金時代が築かれた。

痴情、痴情、狂気、エンコン、保身等、およそ反社会的なものが動機になって起る犯罪と、その基盤に蔵しながら、推理小説がこうも多くの人々に読まれたのは、何故だろうか。—— それは、その中に美的感動があるからだ—— 推理小説の大半がそうである様に、犯罪者は保身の為に完全犯罪をむくろむ犯罪者は考える。自分のアリバイ作りを考え、動機をかくすため殺人を心中にみせようと、赤の他人まで殺す。犯人は考える。法律の網目をくぐるため緊急避難の成立を考える。

そう、ここである。推理小説の醍醐味は、犯罪者がおのが身を守るため考えに考える。ここに人的エネルギーを出し尽した美しさがあるのではなからうか。立場を置きかえ、刑事から考えてもそうだ。

練りに練った犯罪者の計画を、考えに考えて解く、ここに、その刑事の人的

エネルギーを出し尽した美しさがあるのではないだろうか。

推理小説は絵画や音楽と同じ美的感動だ。

そして又、その中の登場人物は吾々だ、且つての推理小説の様に天才でもなければ狂人でもない、明智やホームズは出てこない。

だからこそ、読者はその中に溶けこんで行き易いのではないだろうか。

清張の初期の作品に“カルネアデスの舟板”というのがある。

その大意はこうだ、大海に漂流者が二人、舟板が一枚、二人がつかまれば、舟板は沈んでしまう、この時、自分の生命を守るため、他の一人を殺すことが犯罪だろうか、というのである。

清張の犯罪者はこの様に窮地に立った者が極めて多い。

読者だってこんな立場に置かれれば、罪を犯すかも……そんなケースが多い、ここに彼の作品の魅力の一端があるのではないだろうか。

と、まあ、一生懸命はめたって、此頃の作品はこんで駄目。

一山いくらで、髷岳交換屋に持っていつてもらおうんだな。

大衆小説家って奴は一寸売れ兒になると、すぐつけ上る、出来ぢやないね全く。

今日の“泪” —— あくびの時、出ただけ

今日の“怒” —— ◎電車の中で編物とする女性、あれがいい恰好だと思っ
ているのかねえ、文化画家が聞いてあされるよ。

◎乗員電車のババア、空席を探すあの目つき、あげくの果て空席なしと見ると、若い俺達の前に立っ、どうかと思
うねえ、60以上のババア、ジジイは淡路島で焼き捨て
たらどう。ガソリンぶっかけなくても良くもえるよ。
拓いているからね。

今日の“笑” —— 雑誌、週刊誌の対談や座談会の記事、所々に（笑）とい
うが入っているが、偉い人はヘンな所で笑うね。

読んでいる人は面白くも、くすぐったくもない所が多い
よ。（笑）

美樹さん、今日はこの辺で失礼するよ。どうも中途半端になったけれど、
徒然にまかせて筆を執っていると、こうなっちゃった、別に精神分裂症のお
それはないから安心して下さい。最後に松尾先生の時間にこんなラフアター
など書きましてお許し下さい。----- アバヨ！

2回生コーナー

。後期の時間表は幸か不幸か、土曜日は統計学のみで、おまけにこの課目は全く人気なく、キトクなふも人をのこして、9割までが時代の超先端の週休5日制と相成った。おまけにつまらない放養課目、時々の休講と、自己休講をつくり、まさに時間表は古寺の破れ障子以上のものとなった……これは喜んでいいものだろうか。

。とはいっても、これらの時間をクラスまとまって何かするとか、やりたい事をするという風にももっていけず、寮の春は冬眠の如くひっこみ、学校の近くのものはずぐに消え、通学組はソフトボールやゴモクナラベをしては、ア、タイクツと、ついに我々も工織特有の泥滞ムード、無気力感の破滅的ムードの中に落ちこんだ。

。これではいけないと、カンフル注射の意もかねて、このかわいそうなクラスの為にと、カラ元気をだれも合ハイの交渉を池坊短大、同女と求めたが、時期や先方の学園祭やその他種々の理由(懇縁は自由です。)で具体的問題にはいかずハイソレマデヨ。

。先が真暗な我クラスにただ1条のカンフルは物理化学実験が後期より始り、10テーマあり、これが1週間交代であり、これにはまったく遊がわけもいかずどうしても1週間でやり上げようと頑張っている。現に蓄電池の実験などは、放電、充電それぞれ12時間前後もかかるので、夜中の時返かかったとか、1時返だとかとうわさ、これからの底ビエにはおもいやられる状態である。

先月25日の体育祭は各方面の努力にも拘らず、雨で中止という最悪の事態になったが、仮装行列の準備においては1回生の諸君はよく頑張ってくれました、資金援助+数人の援助のみという2回生の力がいなさは許してくれ。

知識人に栄あれ

4 回 生 金 田 洋 二

“インテリゲンチヤ”この甘美な響きを持つ言葉は、一昔前には矚目の的であったが、今日のように優秀な学士様が恣に溢れている現状では、ただの学士様程度では、この仲間に入れてもらえない恐れがある。この仲間であることを示すには、天皇制から物価対策に至るまで、理解していようと何であろうと、この国の諸制度、習慣等にケチをつけてはシタリ顔をする術を心得ることが必要久くべからざることである。同様のことは、西政のインテリ達にも言えることであって、ある本によれば、イギリスのインテリ達は自分達がイギリス国籍であることを恥じ、国歌の演奏中に不動の姿勢をとることが、慈善鰐を盗むことよりも恥しいことだと思っているのは事実であるとしている。このイギリスを我國のインテリ達は“神土の国”と崇め、“イギリス紳士”と呼ばれることに必死の努力をしているのだが、この純粋さは神と同格とも言うべきである。そこへ、一度、プロヒューモ氏の事件が起るや、我國の最もインテリ的雑誌は、ただちにこの話題をとり上げ、報告なるものを邦訳して一大センセーショナルをまきおこした。この事の結論としては、結局、インテリの興味も、やはり又、週刊誌的なものであったことを暴露したにすぎなかったのであった。イギリス紳士の正体が、このようなものである事は、一部の紳士方の非常な宣伝にもかかわらず、多くの人々には、公然の秘密にすぎなかったのであり、下劣であったのは、イギリスの上流階級だったのではなく、多くの人々の下劣な出歯亀根性の罪をあわれむるプロヒューモ氏がひっかぶったというだけの詰らない話にすぎないのである。この事件によって、世界の上流階級の人々は、少しの人々が自分の命取りになることを身にしみて怒ったことだろう。このような汚らしい大人に比べれば若いインテリ達はどうかであろうか。彼らは常に進歩派だと信じており、例の東欧製や、最近では中国製のCMを暗喩してはアメリカの悪口を言っているし、少し異った文章を好む向きには、西政のサルトルらを信奉し、「実存」とか「不条理」と言っは悦に入っている。しかし彼らも又、外国に頭が上らないことでは、伝統を頑強に固執しているようであるが、一部には、自分たちを深く見直そうとして、自分達の位置づけに強い努力を払っている連中もいる。このように西

政から何でも輸入するのにこの“インテリゲンチヤ”という語は、ロシア語であり、19世紀ロシアのツアの専制に対して文章をもって大衆の為に斗った知的分子にちなんで名付けられたのである。それ故、インテリの仕事は、本来から言えば、文化的に大衆を指導する人々を指すことになる。ところが、今日大衆を指導している政治や新聞人が決してインテリとは思えず、むしろ真のインテリ達は、自分の枠の中にとじこもり自昼夢を追うといった生活をくり返している。このような亜インテリとも言うべき層は非常になく連続的に続いており、一般的に、このような層は、サラリーマン（公務員から会社員までのいわゆる俸給生活者）を占められているが、中でも代表的知識人としての文化人と呼ばれる連中の様な行動は、誠に愉快的な戯画である。

文化人にも色々あるが、多くは、西欧に心酔したヤカラが多いのであって徹夜してでもF.デイスカウには逢わねばならないし、ビュフェヤシマガールと全く芸術には眼がないのであり、ある金持は、自分で美術館を作り人々に鑑賞させているが、この人達は美術には関心があつても、自然の美には余り興味がないらしく汚らしい看板を山に立てては平然としている。このような自己矛盾はこれらの人々の共通の性質であり、同時に又、日本全体がそろいような雰囲気の中にある。台所は苦しくとも大國意識だけは十分であり、日本のアウトバーン道のエツフェル塔から、さらには、東洋のナポリヤハワイまであるし、高度成長経済の花々しいPRは、諸外国に我國の実力を認識させたし余勢を駆って、石炭ガラをトランジスタに変える技術まで輸出するに至つたのであり、少し前には、余りに余つた金をイタリヤに提供すべく、石畑カスを買上げてやるのに、太っ腹な我大会社は、慈善事業の先を争うという美談までおまけにつけた。ここで重要な事は、これらの事は、我國で最も難しいそれも世界的に有名な大学を出た秀才達、即ち、インテリ中のインテリ、超文化人達の公明正大なる結論であつた。こういう事から、我國のインテリは非常に高貴であるから、下らない仕事は外國の下僕達にやらせて、それを買上げてやるのが、我インテリの大物たる風格を示す大切な条件に違いないのである。さらに、この高貴なる人々の手になる仕事は、単にソロバン勘定で売ってやるにしても、過去の罪業の償いといったようなマリストの復活を思わせる名言とともに、一種独特のポーズをとつてみせる必要があるようである。

又、文化人達は、外國人の動静を常にさぐつており、平和時代に退屈した西欧のインテリ達が、我“ZEN”とか“SHIBUMI”に手を出すに及んで、愛すべき我インテリ達は、芭蕉をひもとき、大抵を逆輸入するといつ

に始末であり、歌舞伎や文楽も恐る恐る外人達に差し出したところ、どこに
感心したのか知れないが、とにかく、ほめたので、大いに自信を持ち、保護
保存と騒々しく叫び始めるのである。仏像の修理や座禪を組んでは、我こそ
は大和男子と胸をはって見せるのだが、一方では、すぐ本性を表わして漢字
の廃止に力を入れ、少し前の鴟外や漱石を口語訳して読むといった大変な代
物であり、お経や聖書までも口語訳して事は解決したと信じているのである
。これらの傾向を助長する人々の得意の表現は、合理的、科学的、という形
容詞であり、この技術革新で勢力を得た刀をもって快刀乱麻を断つが如く、
宗教であろうと道徳であろうと、バッサバッサとやってしまうから始末が悪
い。合理的、科学的に修理されに仏像等は、単なる偶像であり、美術品であ
り、仏像それ自身が意味したものは、すでに失われているのに気づかないよ
うである。古代の工人達は、結局、単なる芸術家になり下ってしまったこと
になるのである。このように、文化人達のもつ価値感覚は、全く不可解であ
り、科学技術においても、例の原子力発電なるものを、それこそ鳴物入りで
手に入れ、ただ今、運転中だ、いや止っていると、うるさい事この上もない
。この有難がっている機械も何のことはない巨大社の商品なのであり、原子
力研究所が、パッカーを買ったからといって大騒ぎをしているような愚を
くり返しているのは笑止である。

一方、若いインテリ達は何をしているだろうか。これは、一般に学生達で
構成されているが、彼等は、自分達も進歩的とする為には、他の多くを保守反
動だと決めつけるのにやっきとなっている。その好む文章も極めて難解、抽
象性に富んでおり、我々大衆をその哲学用語に慣れさせるべく、新啓蒙主義
を打立てておられるようである。真に充実した社会を作る為には、大衆の知
的水準を引き上げることこそ、若人の一大使命に相違ない。ところが、彼等
の親心(?)を知らず、大衆は彼等を非難し、さらには、広島では大いにムクレ
てしまう社末だった。このような使命感を持たない層は非常に多いが、彼等
の考えていることは、中国製のゲームとアルコールの中に人生感を見い出さ
うとする竹林の七賢の心境である。さらに若い、謂ゆるティーンエイジマな
いし、インテリの卵とも云うべき子孫達は、バイオリンや、ピアノの練習に
余念がないのであり、その近所に住むことは、とりもなおさず、その発する
奇妙な現代音楽の鑑賞者にならされることを意味する。つまり、地域社会は、
いるかいないかわからぬ一人の天才を見い出さんと必死になっているのであ
り、その大部分が無駄な徒勞に終るであろうことは言うまでもない。こうし
て育ぐまれて成長した少年達は、誠に親のしつけよろしく、自己を主張す

る為に
つには
階級か
界的傾
原因の
等をみ
を引つ
相変ら
達に確
古典的
を説く
と信じ
ある。
こう
無責任
事は
という
からな
ある。

下
その
がし
くだ
こす
模
のも
どん
下
はら

る為には手段を選ばずなんて茶番を演じて幕は下りるのである。(これは、一つには、教師達の狂言沙汰の影響かもしれない。彼等は、この為にインテリ階級から追放されるという運命になった)。このように、青少年の不良化は世界的傾向を示し、我国のみならず各国のインテリは、ヤっきとなって、その原因の論争をし、道徳をとくが、道徳教育や宗教が役に立たないことは、彼等を見れば十分である。しかも、自分の家庭から何冊かの悪書と称するものを引っ張り出して、悪書追放運動を説くに至っては何をかや況わんである。相変わらず「捕えてみれば我子なり」の笑えない喜劇をくり返しつつも、自分達に確固たる信念、判断力を欠いていたことに気づかないでいる。相変わらず古典的道義感をもって、性的なものの嫌悪を叫びながらも、自己の封建性を説くという有様であり、他方には、それを解放的に書くことこそ文化人だと信じている人種が恣に横行しているという矛盾を内包しているのが現状である。

こういう状況の中で、インテリは、常にものわकारの良い父親顔をして、無責任な事を言つては、その出て来た悪影響を他人の責任にしている。この事はインテリの笑いの中にあるものが、如何に悪い意味での女性的であるかということを示している。ともかく、我々(僕を入れてもらえるかどうか分からないが)もインテリの仲間であらうから、心から栄あれと祈るしだいである。

下宿していた頃の生活

Ｃ3回生 山下清吾

下宿生活に終止符を打って既に五ヶ月、ノ時間45分を要する通学が、そろそろ面倒臭くなってきた。寒いし、超々満員の地下鉄を思うと、家を出る気がしなくなる。この殺人的としか形容できないラッシュについて、しばしば、くだらない妄想をいづく輩が居るが、そんな余裕はないのである。眠い目をこすって起きるとき、惺眼をおさぼっていた生活がむやみにやたらと恋しい。

僕の下宿生活の思い出は、そんなに過去のことではないのに二回生のときのものしかない。千エンの編集委員から投稿を強迫され、仕方がないから、どんな生活をしていたか思い出すまま書いてみよう。

下宿は御室にあった。ここに一回生終了と同時に移ったのだった。家主とはちよつとごたごたがあったが、また二食村の下宿生活から外食の生活に変

って、最初はいくらかともどったが、一年間、二度と出まそうにない生活をした。しかし、それがまたなつかしい。

一般の人が昼支度をする頃、それが起床時間だった。嵐電の一番電車が、走り出す頃、それからふとんにもぐりこむ時間だった。4畳半の部屋一杯、これ以上汚なくできないという位散らかして、机の上には本とノートが乱雑に放り出してあり、灰皿には、いつからたまっているのか分らない程、吸がらが山盛りになっていた。天井には種々雑多なものが張りつけてあり、ダラシない学生の典型的な部屋だった。勉強、この記憶は少ない。試験のとき、少し位したかな？とにかく殆んどしなかったのは間違いない。暇さえあれば、バク！この表現は正しくない。いつも暇な時間にしていたのだから。毎日、ポンヤリと他愛ないことを考えながら、タバコをふかしていた。同じ下宿に居た二人の立命の学生は大学に入ったばかりで一見真面目にしていたが、いつの間にか、こっちと同じような生活に陥っていった。一人は夜間生だったので余り誘わなかったが、毎晩、インスタントコーヒーをホット一杯にわかし、下らないことをだべって、気が向いたら風呂屋が閉める頃、行水に行った。風呂帰りには広沢の池の方へブラブラ行ったり、仁和寺の前をよく屋台が店を出していたので、石段にすわって星を見ながらラーメンをすすった。食べ物の話、下宿の思い出はこれにつきる。菓子、栗物の類ではなく、三度、三度の飯の話である。大体御堂周辺には飯屋というものがないから、外食は不便だった。最初の頃は学校で食べていたが、時間がうまくいかず、大抵、ホコリだらけの部屋に寝こらんでモソモソ食べた。モソモソ食べると言っても自炊道具は何一つないから、すぐ食べられる物、パンとカンズメが食糧だった。一週間分として山程のカンズメを買って来て、腹が減ったと言っては食べるので三日位しかなく、無計画な生活だった。しかし学校で食べるのより楽しかったように思う。立命の奴と無い智慧をしぼってカロリーを計算し、栄養失調になるとか、ならんとか、ビタミンが不足だとか何だとか、よく言った。夏に入る頃市販されている殆んどのカンズメの味を覚えてしまって、手元には砂糖と塩しかないから、味付けにも限度がありとうとう同じようなものばかり食べるのにあいてしまった。三人で何を食べようかと言い合っている内に、それまでも時々食べていた即席ラーメンに抽送券がついて、当ればハワイだったかどこだったか忘れてしまったが、行けるということで慨然元を取り戻し、今度は一日中ラーメンばかり食べるようになった。30個入りの大箱をいくつ買ったか覚えていない。よく食べた。あのラーメンは初めの内かなりうまい様にも思ったが、起きてから寝るまで食べていると嫌味がでて

きて、臭さが鼻について困った。勿論、ただラーメンだけを食べるからであろうが、カンズメを買う位ならラーメンを買った方がよいという調子だった。一度、卵を入れて食べたが嫌味が増して食べれなかった。こんな場合でしばらくの間ラーメンばかり食べていたが、別に栄養失調にもならなかったように思う。しかし随分無理をして食べていたらしい。相送券が全部はずれと分った日からもう食べる気がしなくなって、残っている分を店に返してしまっただけから、それに今でもって、このラーメンだけは食べる気がしないのだ。それからはまたパンとカンズメの生活に戻ったが、家の方から野菜も食べるよう再三再四言われたのでキマベツも食べることにした。キマベツは洗剤で洗って（但しこの洗剤はよく落ちないと駄目、あるとき、また泥のついてる奴を食べたら、翌日からモーレッツな下痢に襲われた）マヨネーズか塩をふりかけて食べるのである。ところが水が冷たくなっていくにつれ、洗うのが面倒になり、買ってきたのをそのままポットに入れ、ゆでるのか煮るのか、よく分らないが、一匙殺菌とか殺卵（無論回虫の）そして食べるようになった。思えばこれが最初の加工だった。こんな仕方一日に二つ位一人で食べた事もあったが、案外これは腹のふくれるものだと思った。ポットが利用価値のあるのを再認識後は、ミソ汗をつくろうと言い出してミソ、ネギ、フなどを買い込んで、適当にポットにほりこんで煮たのである。初めてつくったミソ汗はうまかった。しかしポットも驚いたことだろう。だが、これが唯一の道具だったから仕方がない、何も湯をわかすだけに使う必要はサラサラないミソ汗をつくったあとは適当に洗っておけば良い、次いでやったことはうどんを煮ることだった。最初は失敗した、ポットにそのままうどんと卵をほり込んでグツグツやったら、卵はこげつくし、うどんはヒーターにからまって洗うのにとても困った。そこで空カンを使うことにした。つまり湯センの要領である。大きめの果物のカンズメの空カンを利用するのが一番宜しい。フタをどっけてしまわず、ポットにひっかけるようにして入れる。このとき水を入れすぎると、湯がわいてくるとあふれるから注意しないとイケない。うどんの味付けは、メンソがよかった。油揚げも入れたし卵も入れた。これもうまかった。湯センの要領でポットを使うことはとても便利だった。時間をかければたいいのものが煮ることができた。これを飯をたこうと計画したことがあった。いろいろ工夫したが、これだけはうまく行かなかった。こうして形ばかりの加工方法を思いついてからは、同じようなものばかり食べていてもアキがこなかった。家に帰る度にマセタ、マセタと言われたが、別段病気にもならなかったから不思議である。食べる事以外でもロクな事をし

なかった。夏夜中に近い頃、タクシーを河原町にとぼしたことも何度かあった。カーテンは落書きでいつはいだったし、センタクなんかしたこともなかった。あんな生活はもうしたくない。否、できないだろう。だから、それだけに懐かしい二回生の思い出である。

追記：協同組合についての原稿を用意していたのですが、チェーンが、こんなに遅くなって発刊されると、書いたこともピントがはずれたことが多くなってしまい、代りにこんなものを書く破目になりました。下手な文を恐縮です。また協同組合については、現在、理事をされている方が書いて下さるよう、お願いします。

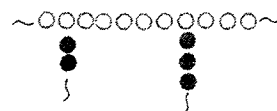
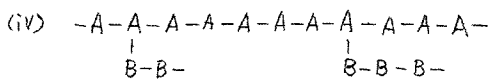
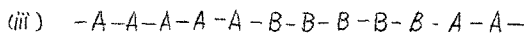
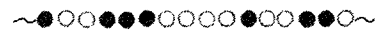
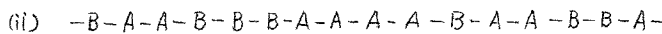
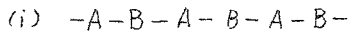
グラフト及びブロック重合

4回生 有松利雄

「CHAIN」に学術的（とってはおおげさですが）な記事もほしいという声がありましたので、勇気をふるって、このグラフト及びブロック重合について簡単に書いてみました。なにぶん経験もほとんどなく、又不勉強の為、数多くの誤りもあることと思いますがどうかご容赦下さい。

1. はしがき

1種のみモノマーを重合する単独重合に対し、2種以上のモノマーを同時に重合させることを共重合という。この場合2種のモノマーによる共重合物の形には次のようなものが考えられる。（A, Bはそれぞれモノマー）



このうち(iv)のものをグラフト共重合体 (graft copolymer), (iii)のものをブロック共重合体 (block copolymer) という。その他幹と枝の組成が同じで立体構造のみ異なるブロックポリマーがつくられるようになった。これをステレスブロック共重合体という。これらグラフト, ブロックポリマーは従来のような単独重合物ではかなえることのできなかったような種々の性質をかなえるべく最近非常に多くの研究がなされている。いまだ工業材料との強いつながりを持つまでには至らないと云われながら, その種類も多く, その合成方法は非常に多様である。

2. グラフト重合の応用

- ゴム・樹脂への応用 例えばABS樹脂などがある。これはAはアクリロニトリル, Bはブタジエン, Sはスチレンで, ブレンド型とグラフト型がある。耐衝撃性が非常に優れ, 低温でも大変よい。またポリブタジエンにスチレンをグラフトさせたものも耐衝撃性によいといわれている。
- 界面活性剤への応用 高分子界面活性剤で親水性のものと疎水性のものを組み合わせることにより可能と考えられる。エチレンオキサイドとプロピレンオキサイドのブロックコポリマーも非イオン系界面活性剤となる。
- イオン交換樹脂への応用 ポリエチレンフィルムにスチレンをグラフトさせ, スチレン部分にイオン交換基を入れることにより, イオン交換樹脂膜がえられる。
- 繊維への応用 繊維へ各種モノマーをグラフトさせ, 例えば吸水性, 熱固定性, 耐熱水性, あるいは染色性の改善などが, セルロース系統, ナイロン, ポリプロピレン, ポリエチレンなど各種繊維について研究されている。
- その他 ポリエチレンフィルム表面へのグラフトによってガス透過性を少くしたり, あるいは紙へのグラフトなども研究されている。

3. グラフト及びブロックコポリマーの分離確認

これらのコポリマーは製造上ホモポリマー生成も考えられるので, それとの分離が問題となる。普通グラフト又はブロックコポリマーとホモポリマーの分離はsolubilityなどの相異を利用してゐる。例えば繊維状物質へのグ

ラフト重合物は 長時間ソックスレー抽出器でホモポリマーを抽出する。そして乾燥後試料の重量をはかり、いくらグラフトしたかを見る。グラフト率、グラフト効率はこのような計算式で示される。

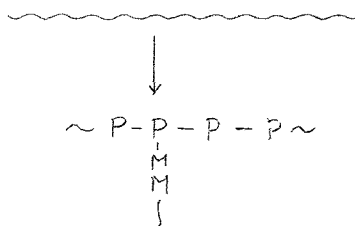
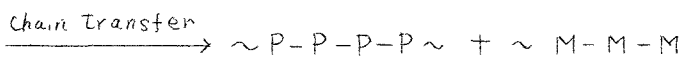
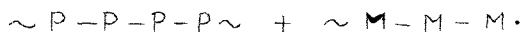
$$\text{グラフト率} = \frac{\text{重合物抽出乾燥後の重量} - \text{重合前の重量}}{\text{重合前の重量}} \times 100(\%)$$

$$\text{グラフト効率} = \frac{\text{グラフト量}}{\text{グラフト量} + \text{ホモポリマーの量}} \times 100(\%)$$

4 グラフト及びブロックコポリマーの製造

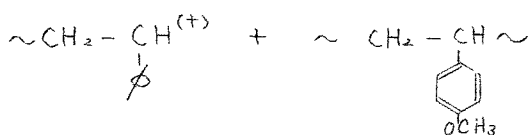
(a) Chain transfer を利用する方法

これは最初に、幹となるべきポリマーと枝となるべきモノマーと開始剤、溶媒等を混ぜて反応させるもので、モノマーの重合過程における連鎖移動を利用するものである。開始剤も一般のものでよく重合形式もごく普通のものであるので、比較的便利で経済性に富んでいると云える反面、多量のホモポリマーを生成する。

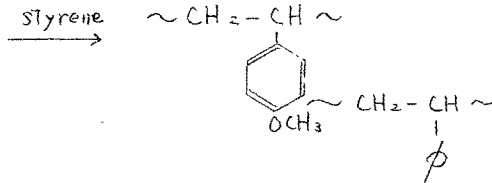
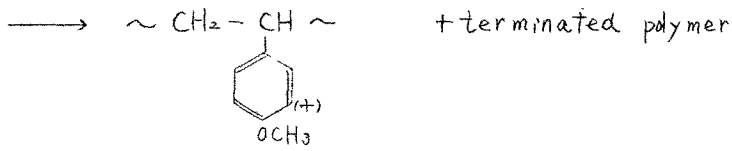


(例) P.V.A 繊維又はフィルム, スチレン, 開始剤(過硫酸カリ又は A.I. B.N) 溶液を混ぜ封管し 60°C にて反応, P.V.A のスチレングラフト物を得ている。

上記のようにラジカル重合のみでなくイオン重合の時も次のようになっていく。



(次頁へ続く)



※連鎖移動 (chain transfer) について

これについては、高分子合成反応 (鶴田禎二著, 日刊工業新聞社) などに詳しく解説しているが, 溶媒への chain transfer のみについて簡単に考えてみる。

		速度定数	反応速度
$\text{I} \longrightarrow 2\text{R}\cdot$	} 開始反応	k_i	v_i
$\text{R}\cdot + \text{M} \longrightarrow \text{M}\cdot$			
$\text{M}\cdot + \text{M} \longrightarrow \text{P}$	生長反応	k_p	v_p
$2\text{P}\cdot \longrightarrow \text{P}$	} 停止反応	k_t	v_t
$2\text{P}\cdot \longrightarrow 2\text{P}$			
$\text{P}\cdot + \text{S} \longrightarrow \text{P} + \text{S}\cdot$	連鎖移動		

[M]; モノマー濃度, [M·]; モノマーラジカル濃度, [I]; 開始剤濃度, [S]; 溶媒濃度

$$v_i = 2k_i [I] \dots (1), \quad v_p = k_p [M][M\cdot] \dots (2), \quad v_t = 2k_t [M\cdot]^2 \dots (3)$$

定常状態では [M·] の生成と消失は等しいから,

$$v_i = v_t \quad \therefore 2k_i [I] = 2k_t [M\cdot]^2$$

$$\therefore [M\cdot] = \sqrt{\frac{k_i}{k_t}} \cdot \sqrt{[I]} \quad \dots (4)$$

動力学的連鎖鎖長 DP_0 は,

$$DP_0 = \frac{v_p}{v_t} = \frac{k_p [M][M\cdot]}{2k_t [I]} = \frac{k_p [M]}{2\sqrt{k_i k_t} \sqrt{[I]}} \quad \dots (5)$$

又溶媒への連鎖移動を考えると

$$\frac{1}{DP} = \frac{2k_t [M\cdot]^2 + k_{tr \cdot s} [M\cdot] [S]}{k_p [M][M\cdot]}$$

$$\therefore \frac{1}{DP} = \frac{1}{DP_0} + C \cdot \frac{[S]}{[M]} \quad \text{----- (6)}$$

となる。このCが Chain transfer const. である。この $\frac{1}{DP}$, $\frac{[S]}{[M]}$ はわかるので、それをプロットし、その直線の勾配としてCが求められる。

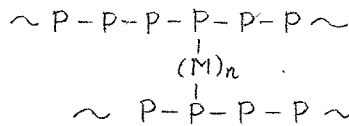
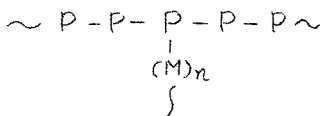
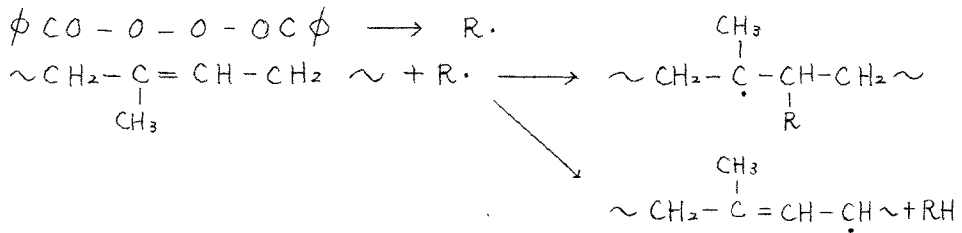
Cの2・3の例は次の如し。(at 60°C)

Solvent	Styrene	Acrylonitrile	Vinylacetate
Benzene	0.018	2.46	3
Toluene	0.125	5.83	21
Carbon tetrachloride	90	0.85	$> 10^4$
Carbon tetrabromide	13,600	—	$> 39 \times 10^4$

(b) ポリマー中の functional group を利用する方法

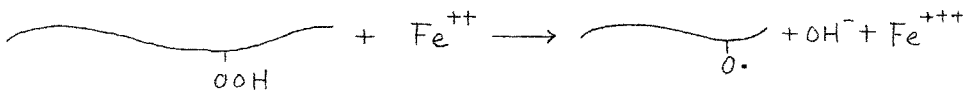
(i) 二重結合

天然ゴム、合成ゴム等はその構造中に二重結合をもっている。これに注目してグラフトないしは架橋結合を起こすことが考えられる。



(ii) 酸化法

開始剤の一つである有機過酸化物 B.P.O のように高分子過酸化物を開始剤の形にしてグラフト重合を起させようとするものである。このポリマーハイドロパーオキサイドは熱分解又は次のような形でグラフト重合を開始する。



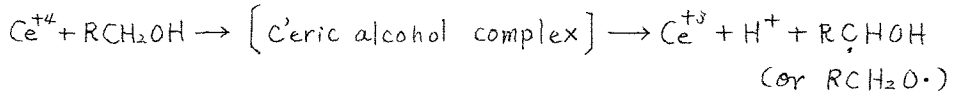
ハイドロパーオキサイドの生成にはオゾンなどが使われる。

この方法でできたグラフト物には、ハイドロパーオキサイドが残存する可

能性も多く、これが後々まで影響することもある。又グラフト重合一般に云えることであるが、これらの酸化によって主鎖が切断される危険が多い。

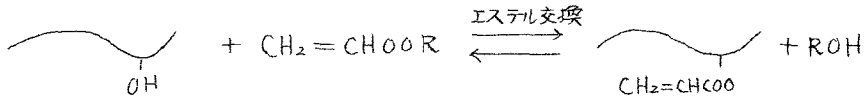
(iii) Ce^{+4} 塩によるレドックス系

硝酸オキシセリウムアンモニウムを使うもので、 Ce^{+4} はかなり強い酸化力をもち次のようにしてポリマーに活性点をつくる。



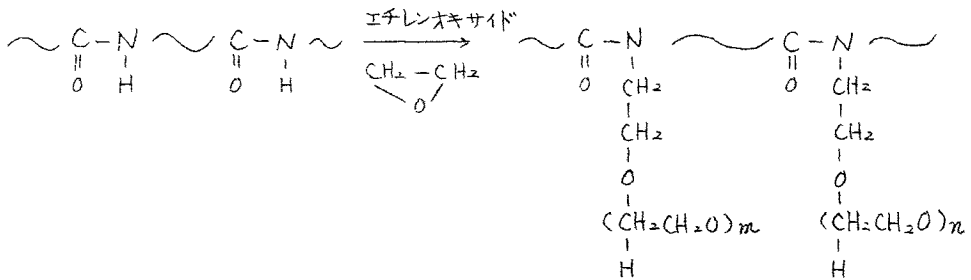
この反応は対象ポリマー中に還元性基を必要とし、P.V.A., Cellulose, アミン類等に有効であるとされている。

(iv) エステル交換

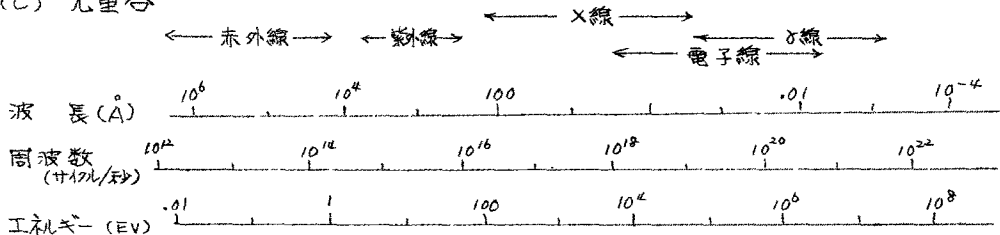


エステル交換によってポリマー主鎖に二重結合を導入し、そこから重合を起す。

(v) エチレンオキシサイドの導入



(C) 光重合



赤外線	10000 Å	1.3 eV
赤	7000	1.8
緑	5200	2.4

紫	4000	3.1
紫外線	2000	6.1

光エネルギーによりポリマー中にできた活性点よりグラフト重合が進む。普通光増感剤等を併用する。

⑧ アンスラキノン光増感剤としてセロファン、グイスコース等にアクリロニトリルをグラフトできる。

(d) 放射線

- X-ray ; X線発生装置
- γ -ray ; Co^{60} その他
- 電子線 ; Van de Graaff など

前照射法

幹ポリマーに照射後、モノマーに接触せしめて重合するもので、真空の場合はポリマーラジカルによるものとみられる。この場合グラフトは低温でもよく進行し、chain transfer の無視できるような条件ではホモポリマーの生成も少なくすむ。空気中のものでは、ヒドロパーオキサイドが生成されるものと考えられている。

同時照射法

幹ポリマーとモノマーを共存させて照射するもので、かなり多量のホモポリマー生成も考えられる。

⑨ 木線など色々のセルロースに、 γ 線や電子線を前照射又は同時照射してスチレンをグラフトできる。

(e) 機械的方法

ゴムなどの場合、剪断力を与えポリマーを切断するとそこにラジカルができる。従って適当なモノマーの存在でブロックコポリマーが得られる。

以上大体グラフト及びブロックコポリマーの製造方法について述べたが、要するに幹ポリマーが板となるべきモノマーの重合開始剤となればよいわけである。

5. グラフトコポリマーの性質

グラフト及びブロックコポリマーの軟化点、グラフト(又はブロック)部分の長さ、数など、あるいは溶液について色々研究されている。勿論グラフト(ブロック)コポリマーと単なる二種のポリマー混合物の比較もなされている。又グラフト(ブロック)コポリマーの機械的性質についても色々と調べられている。例えばナイロンにスチレンをグラフト(放射線による)させたものは、強力は低下しないが、弾性、吸水性、染色性、熱固定性などは低

下する。

6. 参考書

※ Block and Graft Polymers (W.J. Burlant, A.S. Hoffman 著 Reinhold)

大体ここで述べたようなわけ方で製造方法等について詳しく書かれている。次の本とくらべて、どちらかと云えば理論的であるが実際例も多くのっている。

※ Block and Graft Copolymers (R.J. Ceresa 著 Butterworths)

分類の仕方などは大体上記の本と同じであるが、応用的、工業的方法等、PAT. などかなり詳しく紹介している。

雑誌

※「高分子」1963年8月号(井手, 高分子, 12 636 (1963))

9月号(" " 12 697 (1963))

※「化学」1963年8月号(井本, 化学, 18 732 (1963))

ソ連の論文の紹介 学問的分類体系を示している。

※「工業と製品」高分子データブック

7. 引用文献

読むことのできる文献からも色々引用し、又時にはまるうつしもありますが、この際省略させていただきます。

我々一回生ももうすぐ大学生となって初めての正月を迎えることになった。各自の生活も自宅通学であれ、下宿生活であれ一応ペースに乗ってきた様である。しかし一方所謂「工織ムード」の悪い面も色々感じる様になった人も少くあるまい。その「工織ムード」は少からず両学部の間隔、又学部の人数の少さなどが原因になっていると思われる。一回生としても学部が離れているための不便、又大学生活のものたりなさを感じたことは一再にとどまらない。それにつけても、今回の統合問題がスムーズに進んで、両学部各学科が、より充実した形で終結することを望みたい。欲を言えば僕ら一回生が卒業するまでに日の目を見た統合後のわが校を見たい。それが僕らの偽らざる心境です。

編集後記

高雄の紅葉も色あせ、師走の声を聞く今日今頃ともなると、北風に街路樹の枯葉が舞い、京の街々はすっかり冬の装いを整えてしまっている。

この京の冬につきものなのが、「底冷え」であるが、今耳は例年にも増して、その寒さは厳しい様である。そしてこの極寒の冷気に我々編集者諸子の少々出来の悪いお脳を冷却しながら、編集を進め完成したのが、このChain 17号である。ところで、今回は前回迄とは異なり、或る一つのテーマを中心として、Chainを編集しようという方針の下に、我々熟考(?)の末、「学部統合問題」をテーマに取り上げてみました。何分にもはじめての試みでありますので、皆様読者諸氏のご批判の対象となる点も少なからずあるかとも思いますが、長い目で見ていただいて、更にChainに対しての一そうの暖かい御支援を今後とも宜敷しくお願いする次第です。

Chain No.17

発行日 昭和 38 年 12月 20 日
発行者 京都工芸繊維大学・繊維化学科
印刷 北斗プリント社 TEL.⑦ 0231
編集 繊維化学Chain 編集部
編集代表 加原 敬 助
